小　　児　　科　　学

【単位数：２単位，授業28コマ，予備２コマ（定期試験含まず）】
当該科目は医師としての臨床経験を持つ教員が担当する授業科目である。

１　科目責任者

山田恭聖　教授（周産期母子医療センター）

２　教育目標

（１）　ねらい（Ⅲ-４-ｂ）

① コンピテンスである“医学知識と科学的探究心”の達成のため，小児医療を行うのに必要な知識である病態生理を理解した上で，論理的思考の元に臨床症状，検査方法，治療法を積極的な自己学習を中心にして修得し，そのことによって“プロフェッショナリズム”を養うことにも繋げる。

② 新生児期から思春期にかけての生理的成長・発達とその異常の特徴及び精神・社会的な問題を理解し，小児及び小児疾患の特性を把握した上で，小児疾患の病態，症状，診断並びに治療の概略を理解する。

（２）　学修目標

① 小児の成長・発達に関する基本的な知識について述べることができる。
② 小児保健としてなすべきことは何か，どのような形で行うか，具体的に述べることができる。
③ 小児のバイタルサインや検査値の正常値は，成人と異なる事を理解する。
④ 小児特有の疾患では，好発年齢を把握し，病態生理から症状を説明し，治療計画が立てられる。
⑤ 小児でよくみられる疾患では，疫学，病態生理，好発年齢，好発時期，臨床症状，検査成績，合理的な治療法を常に念頭に置いて説明する事が出来る。

３　成績の判定・評価

（１）　総合成績の対象と算出法

	成績対象	割 合	方法・コメント
定期試験	○	80％	多肢選択問題を原則とし，一部記述問題を含む場合がある。
小テスト	○	20％	アクティブ・ラーニング時の小テスト 【再評価について】 やむを得ない理由で欠席した場合でも，追試験の機会はない。
態　度	○	―	態度不良の場合は，総合成績から10点を限度に減点をする。

出席：　定期試験を受験するためには欠席率が3分の1を超えてはならない。

（２）　合格基準

評価対象の合計が60％以上（又は60点以上）で合格とする。
60％未満の場合は，再試験を実施する。

（３）　再試験・再評価の方法

再試験は記述問題を原則とし，一部多肢選択問題を含む場合がある（60％以上で合格）。

（４）　課題（試験やレポート）へのフィードバック

定期試験の成績についての総括を学内メールで実施する。
これにて理解が不十分な項目について再確認を促すとともに，定期試験で不合格となった者は再試験に備える。

4　教科書

書 名	著 者 名	出 版 社	教科書として指定する理由
レジュメ配付			

5　参考図書

書 名	著 者 名	出 版 社	参考図書とする理由
日本語版　ネルソン小児科学　原著第19版	監修:衛藤義勝	ELSEVIER	世界水準の基礎的内容が網羅されている。
病気がみえる Vol.15 小児科	医療情報科学研究所　編	MEDIC MEDIA	基礎的な内容が最低限必要な知識として図解を駆使して提供されている。
標準小児科学(第9版)	監修:原　寿郎	医学書院	基本的内容が学生の理解しやすいように記載されている。
小児科学(改訂第11版)	編集:加藤　元博	文光堂	基本的内容が学生の理解しやすいように記載されている。
国試小児科学(第6版)	編集:井田博幸	TECOM	基本的内容が国家試験と関連付けて記載されている。

6　準備学習（予習・復習）

○ AIDLE-Kにアップされた講義資料を見て，当日までに講義内容を把握しておく(1コマあたり約1時間)。
○ 講義で配付された資料，AIDLE-Kに掲載された資料は講義後に内容を再確認する(1コマあたり約0.5時間)。
○ アクティブ・ラーニングでは，AIDLE-Kにアップされた資料を当日までに閲覧し，内容を自己学習しておく(1コマあたり約2時間)。

7　授業計画

(1)　講義の方法

① 一部でアクティブ・ラーニング(TBLあるいはCBL)を行う。小テスト，グループ内討論，グループ間討論や教員との質疑応答などの後，成果を提出する。
② 知識伝達型の講義の中でも，一部，小グループ討論や講師との質疑応答などのアクティブ・ラーニングを導入する。

(2)　講義の内容

小児科学初回講義で，総論として小児の特性，小児科学の特徴を解説し，以後の各論ではアクティブ・ラーニングを随時行い，自己学修と解説を通じて広い範囲の小児疾患を病態生理から治療までを深く理解していく。

＜参考＞

機会が合えば，講義に替えて近隣の県で開催される関連する全国規模の学会に参加し，最新の医療情報を学ぶこともある。